

チューリッヒ日本人学校での4年間を振り返って

前チューリッヒ日本人学校

大阪府大阪市立巽東小学校 教諭 上村 麻美

キーワード：現地理解教育、現地校交流、学校行事、チューリッヒ

1. チューリッヒ日本人学校について

(1) 概要

全日制的日本人学校（月～金）と、土曜日に開かれる日本語補習校とがあり、この2つの組織が法人チューリッヒ日本人学校運営委員会の下に運営されている。全日制には小学部と中学部があり、日本語補習校には幼稚部、小学部、中学部、高等部、国際クラスが設けられている。全日制は、少人数のため、小学部1・2年、3・4年、5・6年、中学部というように、複式でのクラス編成となっている。授業は、国語・算数・数学・社会・理科・英語（中学部）が単学年で行い、その他は複式で授業を行っている。

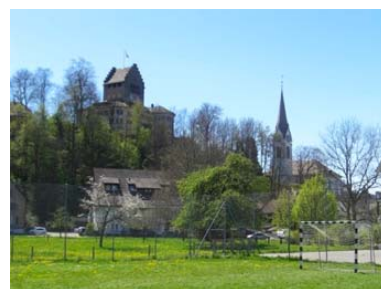


学校は、チューリッヒ州のウスター市にあり、チューリッヒ中央駅からSバーンで15分ほどの場所にある。学校は、ウスター駅から徒歩5分ほどの場所にあり、6階建てビルの2階と3階を日本人学校が使用している。学校周辺にはウスター城や900年以上の歴史をもつウスター教会があり、運動場の横には牧場が広がっている。

ウスター市にはスイスでいちばん大きな柔道場があり、図書館ではドイツ語の紙芝居が定期的に催されている。また、2年に1度、日本の日と称して、ウスター市が開催する日本との友好を記念する式典もあり、日本人に対して友好的な雰囲気が感じられる。

(2) 児童生徒

日本人学校全日制は2016年3月現在、小学部9人、中学部4人、計13人で、派遣期間中の4年間を通していても、全校児童生徒の人数は12～26人であり、小規模校といえる。また、保護者の仕事の関係で在籍期間が1年～1年半の子が多く、児童生徒の入れ替わりが多い。スクールバスはなく、児童生徒は徒歩、バスや電車を利用して登校している。スイスは全体的に治安が良く、学校周辺に住んでいる子が多いことから、保護者の同伴なしで子どもだけで通学する児童生徒も多かった。



両親ともに日本人の家庭がほとんどで、日本の学校から編入し、日本の学校へ戻る児童生徒が大半であった。そのため、日本語での会話には不自由しない児童生徒が多い。

校舎自体が間借りであることから、同じビルを使用している会社の人などに‘Gruezi!!’とあいさつをし、普段から現地の人と交流することが多々ある。運動場もしきりがないので、放課後には近所の現地の子もたちとサッカーなどで遊ぶ様子がよくみられる。

(3) 特色ある教育活動（ドイツ語・英語・英会話）

チューリッヒ日本人学校はチューリッヒ州の私立学校である。そのことから、小学部、中学部ともに週2時

間のドイツ語を学習している。ドイツ語教育については、資格を持つネイティブスピーカーのドイツ人やスイス人が指導している。そのため、日本語なしのドイツ語のみの指導になるので、派遣教員が授業に入り、日本語で子どもたちの学習をフォローをしている。日本人学校で学んでいると、なかなかドイツ語を話す機会がないので、運動会のポスターの掲示を学校周辺のお店をお願いをしにいたり、社会見学などで質問をしたりして、ドイツ語をつかう機会を適宜設けている。その際も、事前に現地採用のドイツ人やスイス人からことばや発音を学び、子どもたちがスムーズに現地の人と会話ができるようにしている。

また、英語教育に関しても、小学部では週1時間、中学部では週2時間、資格を持つネイティブスピーカーのイギリス人から学んでいる。これも、日本語なしの英語のみの指導となるので、小学部の授業の際には、派遣教員がフォローをしている。中学部は教育課程に英語があることから、派遣教員のフォローなしで、オールイングリッシュの授業で取り組んでいる。

(4) 交流活動

小学部、中学部ともに、年に2回ほど現地校との交流をしている。現地校の児童生徒が日本人学校に来るときは、日本人学校の子どもたちが日本のことを紹介し、現地校へ行くときはスイスのことを紹介してもらっている。紹介する内容もさまざま、遊びや食べ物、文字やことばなど、学年に応じたことを取り入れている。また、レクリエーションとしてみんなでスポーツをしたり遊んだりすることもある。また、中学部の人数が少なく、体育でできる競技が限られていた。そのため、現地校の体育の授業に参加して一緒に体育をしたり、ウスター道場で柔道を指導してもらったりした。



日本人学校のすぐそばにある現地校との交流なので、日ごろから町なかで出会うことも多く、その際、交流を通じて学んだ「こんにちは」や「ありがとう」などのことばをかけてくる現地の子どもたちも多い。

日本人学校の児童生徒は、普段はとても人数が少ないので、たくさんの子と一緒に活動できる現地校との交流をととても楽しみにしている。内容を考えたり、ドイツ語でのセリフを学んだり、準備はなかなか大変だが、毎回一生懸命準備をし、取り組んでいる。

(5) 主な行事

1 学期…始業式、着任式、入学式、ゼクセロイテンキンダーパレード、新入生歓迎ハイキング、写生大会、運動会、サマーキャンプ

2 学期…始業式、持久走大会、学習発表会、クリスマス集会、終業式

3 学期…始業式、スキー教室、かるた・百人一首大会、餅つき大会、卒業生を送る会、卒業証書授与式、離任式、修了式

春の訪れを祝うゼクセロイテンの前日に行われるゼクセロイテンキンダーパレードでは、スイスのいろいろな町や、スイスに住む世界各国の子どもたちがチューリッヒのメインストリートをパレードする。日本チームには、日本人学校の全日制、日本語補習校、ジャパクラブチューリッヒの子どもたちが参加している。子どもたちは、法被や着物を着て、沿道のお客さんに折り紙で折っ



た箱の中にキャンディーを入れて渡したり、馬車の上で和太鼓を演奏したりしてパレードに花を添えていた。

2. 現地教育事情

(1) 現地諸学校の概要

スイスの教育制度は、連邦政府により基本的に州が決定する権限を握っている。このため、教育制度は州によって大きく異なっている。例えば、義務教育の期間は、ベルン州では、日本と同様に小学校と中学校の9年間であるが、チューリッヒ州やバーゼル州では、幼稚園・小学校・中学校の11年間となっている。また、スイスは多言語国家であることから、ベルン州では小学校5年生からフランス語、中学校1年生からフランス語の教育が始まる。チューリッヒ州では、小学校2年生から英語、5年生からフランス語の教育が始まる。

進学については、小学校での成績が非常に良い児童は大学進学に向けたギムナジウム（高校）の中学部に進学し、そのほかの児童は地元の中学校へ進学する。勉強が不得意な児童には、実務中学校が設けられている州もある。中学校卒業後の進路も、中学校の成績によって決まり、大学進学を目的とするギムナジウム（高校）か、2～4年間の実地研修も含む職業学校に進学する。

(2) 現地小学校の授業見学

算数の授業では、おはじきを使用して量的感覚を身につけさせていた。また、単に計算するのではなく、少人数のグループに分かれ、たし算ゲームをしながら子どもたちが楽しみながら取り組めるようにしていた。その際、教師は子どもたちの様子を確認し、手立てが必要な子には個別指導をしたり、ヒントカードをわたしたりしていた。また、十分にできる子には、難易度の高いプリントを渡し、より学力がつくように支援していた。また、教室には学習プリントや本、パソコンが置いてあり、いつでも子どもたちが調べたり学習したりできるようになっていた。

移民の子や、多言語地域から来た子のためのドイツ語の授業もあり、絵カードや文字カードなどをつかって子どもたちの言語力が向上するように支援されていた。

3. 現地での生活

安心、安全、正確の3拍子がそろったスイスは、とても住みやすい国だった。たとえば、電車で1分の遅れがあるときには、駅の電光掲示板にそれが掲示され、アナウンスが流れる。治安も良く、子どもたちも一人で出歩くことができた。ただ、物価は非常に高いので、はじめは何を買うにも躊躇してしまった。しかし、地産地消がモットーなので、食材などは安心して食べることができる。

チューリッヒ日本人学校では、帰国した教員の家に新しく派遣された教員が入居するので、家探しをしたり、家具を買いそろえたりする必要はない。そのため、ホテルに滞在することなく、赴任したその日から家に入ることができるので、とてもよかった。また、学校の徒歩圏内に住むことができ、スイス国内は公共交通機関が発達しているので、車に乗る必要もなかったのがよかった。

スイスはコミュニティーを大事にするので、道端ですれ違う人見ず知らずの人同士が‘Gruezi!’とあいさつを交わす。同じアパートに住む人同士でグリルやハイキングを楽しんだりすることも多く、スイスの人と親睦を深めることができる。また、地域主催のイベントも多く、マラソン大会や音楽鑑賞、ナイトハイキングやきのこと狩りなど、様々なイベントを通じて地域の人と交流することができる。

4. 終わりに

12月中旬に派遣先が決まり、1月にはオリンピックセンターでの研修、船便の準備、出国の手続きなど、あわただしく時が過ぎていった。そして、4月になり、満開の桜をみながらの出国。しかし、スイスに到着すると、そこは一面の雪景色。日本ではちょっと暑く感じていたスーツが、スイスでは真逆で、とても寒かった

のを今でも鮮明に覚えている。

赴任翌日には勤務が始まり、時差ボケをする間もなくゼクセロイテンキンダーパレードの準備や学級の準備に追われた。赴任当初のチューリッヒ日本人学校の在籍児童生徒は、小学部・中学部含めて12人。とてもこじんまりとした学校で、はじめのころは少しさみしかった記憶がある。しかし、時間が過ぎるにつれだんだんと慣れ、少人数だからこそできる取り組みがどんどんできるようになった。ほとんどマンツーマンのような授業なので、日本ではできないような活動もたくさんすることができた。また、大阪では小学校籍のため中学生を教えることはないが、チューリッヒ日本人学校では中学生の授業も担当することになった。そのため、小学校と中学校の学習のつながりを改めて実感でき、また、小学生から中学生への子どもの心の変化やちがいを体感することができ大変いい経験になった。

日本人学校での勤務は、本当に忙しく、海外ならではの日本では感じられないプレッシャーを受けることもある。しかし、目の前にいる子どもたちのために自分は何ができるかを考え、実践していければいいと思う。



最後に、チューリッヒ日本人学校で過ごした4年間。本当に有意義な日々を送ることができました。この機会を与えてくださった皆様、そして、お世話になった皆様に心から感謝を申し上げます。